

## 小説同人誌評 32

### 古風な小説

のよさ

細見和之

年四回、季節ごとに書くこの同人誌評だが、今回は本来、秋の分である。すでに季節がひとつ遅れている。そのせいか、今回文学学校から届いた同人誌の数は普段より多かった。

年末年始にかけて読みながら、今回はいささか古風な、重厚感のある作品に惹かれた。

その筆頭は『青磁』第43号掲載の、林達「玩物喪志」。骨董品に惹かれてゆく、三〇歳過ぎからの若者の姿を描いた、四百字詰め換算で二六〇枚を超える作品。

呉服屋の若旦那という立場にある「私」に、ある日不意に、坪田という男から電話が掛かってくる。息子の骨董趣味を心配した父が骨董に詳しい坪田に注意を促してもらおうとしたのだ。しかし、「私」の骨董趣味の未熟さにあきれた坪田は、平岡という人物を紹介することによって、かえって「私」を骨董の世界にのめりこませる。平岡は医者を家業としていて、骨董の世界ではよく知られた大家なのだ。

った。「私」はその平岡から骨董品の吟味の仕方を一から教わることになるのである。

さらに「私」の前には坪田の息子で骨董品を扱う「ギャラリー坪田」の経営者、坪田亮や、京都の古物商の田中など、陰影に富んだ人物が現われる。なかでも、廃品回収を生業としながら骨董品の掘り出し物にも目を光らせている、戸田という人物は、平岡とは対照的な性格で印象的だ。

とにかく、全篇をつうじてこれらの人物たちが骨董品の魅力を縦横無尽に語る。私が知らなかった専門用語も駆使されていて、いちいちウェブ検索しながら読むことにもなったが、その文体、語り口の鮮やかさに感心した。古越前焼が軸になっていて、「F市」とあるので福井市が舞台の中心であることは確かだろう。また、「JRの駅」という表記が登場するので、時代は一九八七年以降となる。そのあたり、若干、隔靴搔痒なのが惜しい気もする。つまり、場所と時代をもっと明確に特定してもよかつたのではないか。

『浮橋』第8号掲載の、青木左知子「人形始末の記」は、こちらも古風でありながら、しつとりとした好短篇に仕上がっている。久しぶりに「わたし」のもとに従姉から電話が掛かってきて、手渡したいものがあるのて会いに来てほしい、と言う。あまり感じよくはない従姉だが、腎臓の重い病気が

にかかっていると言われ、「わたし」はしぶしぶ求めに応じる。

従姉が手渡したいと言っていたのは、祖母の代に由来する市松人形だった。従姉が預かっていたその人形を「わたし」に渡すように、祖母が夢枕に立って繰り返し告げたという。長いあいだぞんざいな状態で仕舞われていたその人形を「わたし」は自宅に持ち帰り、新しいガラスケースに入れてやるが、あるとき「こ、ん、な、む、ご、い、こ、と」という人形の声を聞く。そこから「わたし」は人形の立場にたつて深く思いを凝らしてゆく。市松人形にまつわる民話のような筋書きを、対立的な人間関係もまじえて描いてゆく作者の文体が、いわば痺いところに手が届く感じ。でじつに味わい深い。

『てくる』第29号掲載の、谷河良一「湖上の月」は、三〇代なかばで亡くなった落語家「林家小笹」の生涯、とくにその早い晩年の姿を、マネージャーを務めていた「浅田修司」の視点で描いた、こちらも好短篇。

『竹芸芸能』に入社して二年目の浅田は久しぶりの休みの日だったにもかかわらず、小笹の近江八幡での公演に付き添うように言われる。公民館での小笹の高座は無事に終わるのだが、日帰りの予定を小笹は民宿に泊まると言い出す。その民宿で小笹は浴びるようにビールを飲み、日本酒を飲み、はては「こ

ササオヨグ」と口にして琵琶湖に向かう…。

これは明らかにモデル小説で、「小笹」は実在の落語家「小染」である。作者は当の落語家の属していた芸能プロダクションの事情にも詳しいようで、ここに記されていることはかぎりなく貴重。しかも、たんに内幕を知っているから書けるという作品ではない。落語家への深い愛が背景にあるうえに、それを無駄のない簡潔な文章で記してゆく優れた力量を作者は有している。こういう作品が重ねて書かれてゆけば、芸能史、文化史としても貴重なものとなるはずだ。

『てくる』の同号にはほかにも、加藤清三郎「シャボン玉」、井川真澄「クリシミマス」など、力作が並んでいる。

「シャボン玉」はいわゆるしもた屋が並びかけている古い商店街で母親が続けていたパン屋を継いだ「達夫」の視点で、下町の風情をしつとりと描いて印象深い。

一方、「クリシミマス」は三節からなっている。高校生になって、小学生のときにほのかな思いを抱いていた「育美ちゃん」と出会っていささか甘い感情に耽る一節の「僕」の姿が、二節では育美の視点で徹底的に裏返される。祖父ひとりに育てられ、その祖父が倒れてからは児童施設に入れられていた育美からすれば、「僕」は「ノーテンキ」なぼんぼんに過ぎなかったのだ。しかし、三節目では、そ

の「僕」が救われる。「僕」は「お金貸してくれない」という育美に対して、祖父から自分に残されていた大金を仏壇の引き出しに思わず発見して、それを育美に委ねてしまふ。「僕」はその後、自宅に帰らず街を放浪するが、とうとう祖母とその従姉がいつもランチをしていたファミレスに行き着く。二人の老婆は「僕」に戻ったことをとにかく喜び、お金のことは不問に付す。ここから育美と「僕」の間がどうなりうるのか、作品は開かれたままだ。

『飢餓祭』第48号にも、力作が並んでいる。同誌掲載の、石塚明子「ある選択」は「誠二の場合」と「静江の場合」という二作からなる短篇。

「誠二の場合」の描いているのは昭和六年から十二年にかけて、日本の中国大陸への侵略が進んでゆく時代。尋常小学校の教員を務めている誠二は、兄弟夫婦のもとで暮らしていて、肩身の狭い思いをしている。彼は中学校教員となるための試験の準備をしたいのだが、小学校ではつきつぎと仕事を課せられて受験に失敗する。そんななか、二つの見合い話が誠二にもたらされる。裕福な馬場家と勉強をさせてもらえそうな高村家。誠二は見合いのときに二人きりで話したときの感触もくわえて、高村家の娘を選ぶ。

一方「静江の場合」では、同じ時代の風景が女子師範学校に入学した高村静江の視点で

描かれる。静江の父は小学校の教員（訓導）で、娘も教員にさせたがっている。静江は、師範学校の寮で同室の富士子から、自由恋愛にあこがれるという言葉を聞かされ、文学書を勧められたりする。師範学校卒業後、静江は実家の近くの尋常小学校に勤めることになる。静江にも見合い話があるが、三人姉妹の長女である静江は婿養子を取ることが必須で、また彼女は教員を続けたいと思っている。そんな条件に見合う相手はなかなか見つからない。就職四年目、静江の父は隣の郡の小学校で教員をしている西浦誠二という人物に白羽の矢を立てる…。

こうして「誠二の場合」と「静江の場合」はジグソーパズルのピースのようにぴたりと合うことになる。困難な時代のなか、教員として誠実に生きようとしていた二人の姿が、丁寧な時代考証を背景に描かれている。

同誌掲載の、夏当紀子「動物葬儀社」ふる犠牲者への鎮魂をモチーフとしたファンタジーの、類い稀な傑作。

主人公の「ありさ」は「東北音楽大学付属高校」の、フルートを吹いている一年生。作品はありさが「動物葬儀社ふる」するという珍しいアルバイト先へはじめて自転車に向かってところからはじまる。彼女は間もなく二年生になり、その新学期のはじめには、地区コ

ンクールへの出場者を決める校内の最終審査が控えている。

彼女は六歳まで福島で育ったが、十年前の震災で、母と弟とともに東京に引っ越し、中学までそこで過ごした。父親は福島に残ることを選び、やがて両親は離婚してしまう。「ふるーる」では仕事の合間にフルートの練習が認められているので、彼女にとっては一挙兩得の場なのだ。

「ふるーる」で彼女は「レン」という同世代らしき少年と出会う。レンは持ち込まれる動物の遺体を焼く仕事をしている。最初、とつつきにくい感じだったレンとありさは次第に心を通わせてゆく。ありさは金の豪華なフルートも所持していたのだが、自分には吹く資格がないと同級生の恵理に貸している状態。その金のフルートを取り戻して自分で吹くべきだとレンは論じてくれたりする。

「ふるーる」には血まみれの犬が不意に持ち込まれたり、十年まえの震災で亡くなった牛たちの葬儀が依頼されたりもする。レンはそれをてきばきとこなし、ありさは動物たちに寄り添ってフルートを吹き、やがて彼女のフルートを聴くために近隣のひとたちが「ふるーる」を訪れたりするようになる…。

最終的に「動物葬儀社ふるーる」はそれ自体、ありさの見ていた夢ないしは幻のような形になるのだが、後半の即席コンサートの場

面などほんとうにすばらしく、幻想がもつ力。をこの作品そのものが強く照らし出している。ちなみに「ふるーる」はフランス語で「花」の意味である。

『せる』第118号掲載の、若松由希久「灰田さんの思い出」は、四百字詰換算一四〇枚を超える力作。

夫のDVを逃れて実家に戻っていた「わたし」は、中学生のとき同級生の「灰田さん」と一緒に録音したカセットテープを見つける。テレビアニメに基づいて灰田が書いたオリジナル台本を二人でラジオドラマとして吹き込んだものだった。作品では、このラジオドラマ制作とその前後の灰田の思い出と、現在の「わたし」の姿が交互に描かれてゆく。

ふたりは共通のテレビアニメの熱烈なファンで、そこから急速に親しくなってラジオドラマの吹き込みにまでいたるのだが、灰田はその時点で母とともに父親のDVから逃れている身だった。しかし、ラジオドラマの吹き込みが終わったちょうどそのとき、灰田の父親が灰田と母を見つける。それから灰田は学校に顔を見せることが少なくなり、「わたし」の気持ちも灰田から離れてゆく。一方、「わたし」はようやく見つけた仕事先で、中学校時代の同級生から灰田が十年ほど前に夫によって絞殺されたと聞かされる…。

他の作品でも夫のDV、男性のどうしよう

もない暴力性が描かれているのに出会ったが、この作品ではラジオドラマの吹き込みの際、灰田が「わたし」に口づけして、「わたし」がそれを撥ねつけ、そのことを後悔する場面も書かれている。同性愛というよりも、どうしようもない男社会のなかで女性が連帯する可能性が示唆されているのだと思う。

『VIKING』第85号掲載の、那村洵吾「遺言」は、凝りに凝った短篇。

夜更けのバーのカウンターで初対面の男が「私」に唐突に語るところから物語ははじまる。その男の姉が病院で亡くなる間際に、ようやく駆けつけた妹に「わるかったわね」とひとこと呟いた。妹はその言葉をずっと抱えたまま、子供をひとり遺して死んだ。そんなことを語って男がバーを出たあと、しばらくして警官がふたり入ってきて、その男が近くのビルから飛び降り自殺をしたと告げる。なにか話したかという警官の問いに「私」は「いえ」と答える…。

この不思議な物語のあと、この作品の原稿をそこまで読んだ妻と作者である「私」のやり取りが交わされてゆく。妻は、どうして警官に本当のことを言わなかったのか、と問う。「私」はバーのマスターとのやり取りをあれこれと空想し、あれは妹ではなくて死んだ男自身の話だったのではとも考える。さらに妻は「遺された子供」はどうなったのかと問い

かけ、あげくのはては「あなたの奥さんはね、彼が遺して死んだ子供なの」などと語りかける。

後半の妻とのやり取りはけっして深刻ではなく、むしろ遊び心に満ちている。メタフィクションのひとつで片づけるのはちょっともったいない凝りようだ。

同誌掲載の、優れた筆致で書かれた、長谷川和正「私の件（くだん）」にも大いに引き込まれた。

「私」は東日本大震災で妻の弥生を失った。元来二人は兵庫県で暮らしていたのだが、妻の姪の結婚式のため、仙台へ一緒に出かけていて、「私」はビジネスホテルに宿泊して市内観光をしていたが、妻は実家で家族ともども津波に攫われたのだった。以来、「私」は遺体もあがらないままの妻との思い出の地を呆然と旅している。そして、その旅先でききおくり亡き妻からの呼び声を聞いたりする。

三年目、「私」は「顔は女で体が牛の妖怪」と出会う。その妖怪は名前を「件（くだん）」と名乗り、予言をして三日で死ぬ宿命のだと語る。そこから「私」と「件」の、不思議な交流がはじまる。二人（？）は食事を伴にし、ビールを飲み合い（件は体が牛とあって、何杯でもビールが飲める）、あるとき、ついに件は「あなた、私よ、弥生よ」と叫ぶ…。

最後にこの物語が 内田百閒の短篇「件」

にもとづくことがいわば種明かしされる形になつてはいるのだが、それは「件」が出てきたところで語られるべきだろう。ともあれこの一篇は、百閒の名作を純然たる夫婦愛へと転化して引き継ぐものとしても印象深い。

『AMAZON』第509号掲載の、蛭川崇「闇」も異色の作風。四百字詰め換算四〇枚は超える作品だが、主人公「幸太郎」の意識の記述として、改行なしで最後まで綴られている。こういう書き方は確かに古くからあるが、読みにくいと反発される場合が多い。しかし、作者は達者な筆力で最後まで読ませる。

幸太郎はいまホテルの前に車を止めている。彼は、友人の濱田から聞かされていた不思議な女性と、ラブホテルでセックスするのを待ちかねている。その女性は濱田のスマホに連絡してきて一方的に性的嬌声を発するのだった。濱田は銀行員の傍らでラノベの作者としても売り出し中で、その女性はファンのひとりではないかと語っていたのだが、濱田が幸太郎のアパートに泊まった夜、スマホを忘れてゆき、幸太郎が濱田になりすましてスマホへの着信を受け取ったところ、女性が実際にセックスをしたと言ってきたのだ、ただし、闇のなかで顔を合わさずに…。

スマホで繋がった私たちの関係はすべて闇のなか、と言ってしまうとあまりに教訓的だし、全体を身勝手な男の妄想と切つて捨てる

読者もあるかもしれない。とにかくこういう物語を一气呵成に読ませる作者の手並みに、私は正直感心させられた。

『雑記囃子』第26号にも力作が並んでいる。同誌の楠本熊男「貯金箱」は、親の事情によつて苦しい思いを強いられている子どもたちの姿を描いている。父親（夫）のDVという問題もあれば、母親（妻）の浮気という事態もあるようだ。親の立場からすればいろいろ言い訳があり得るのだが、子どもからすれば理不尽としか言いようがない。作者は雑誌の編集後記にあたるところで「親によつて殺められた子どもたちへのレクイエムとして書かせていただきました」と記している。

一方、同誌掲載の、谷口俊哉「バトウセイウン」は、不意に自宅に現われた、という存在しはじめた謎の人物を介して、崩壊の兆しを見せていた家族が再生されてゆく物語。

タイトルの「バトウセイウン」はその謎の人物の顔つきが、オリオン座にある暗黒星雲、「馬頭星雲」とそっくりいうところから、小学校二年生の息子が名づけることになったもの。言葉も通じない相手で、作中でバトウセイウンの発言は「☆◎▲×△×◎〇×」といった一種宇宙語で表記されている。家族の絆はちよつとした第三者の介入で回復されるかもしれないという可能性が示唆されている。

続いて同誌掲載の、日根幸雄「貫通石の墓」

は、四十五年前の殺人事件をめぐる謎解き。トンネルの壁に塗り込められていた死体がコンクリートの剥落によって剥きだしになり、四十五年前の工事の時点での殺害事件が発覚する。刑事の捜査のなかでその事件の真相をめぐって事態は二転三転する。背景も丁寧に書かれているし、それぞれの人物の輪郭も印象的。タイトルにある「貫通石」は、トンネル工事が完成するたびに関係者に配られていたものというのだが、もうすこしシンボリックな意味が強く出ていると感じました。

さらに同誌掲載の、稲葉祥子「わらし母さん」は見事な出来栄えの民話となっている。こちらは少々詳しく紹介しておきたい。

「わたし」は祖父、父母、叔母、叔父、四人の兄弟、総勢十一人の大所帯で暮らしている。保育園で数を習ったばかりの弟、小吉が家族の数を数えると十人でひとり足りない。姉は小吉に、お母さんがざしきわらしだからだと、こっそり伝える。つぎの場面では、一家があけて、祭の縁日などでお化け屋敷を設けるのを生業にしていることが語られる。とくに叔父の「ジロ兄」は女性たちにアイドル的な人気があるのだ。

この思わぬ展開を受けて、最後の場面では、一家全員が庭に生えていたキノコを食べようとする。毒があっても「おがら」でかき混ぜれば大丈夫とジロ兄は言う。寸前のところで

母が戻って来て、それが危険な毒キノコであることを告げる。それで一家は絶滅を免れるのだが、さらに母の言葉によってすでに以前にその家族全員が同じ毒キノコで死滅したことが語られる。つまり、この一家はみんな亡霊的な存在なのだ。

末尾には、参考文献として、「柳田国男『遠野物語』（新潮文庫）」と記されている。

確かに、「遠野物語」の十八ではざしきわらしのことと毒キノコで全滅した一家のことが記されている（七歳の女の子だけ食べずに生き延びたとある）。また十九では、「芋殻（おがら）」でよく掻きまわしたあと食べれば毒キノコでも安全と行って食べて全滅した、という話が載っている。こういう記述から「わらし母さん」という作品を造形する作者の想像力は半端ではない。

『星座盤』第15号では、清水園「焼き飯」がまとまった短篇に仕上がっている。

故郷を出て、大阪の大学に入ったばかりの「僕」は、新聞配達のアパート代の入った日、以前から気になっていたアパートの向かいの中華料理屋らしきところに足を踏み入れる。いかにも怪しげな店内で、婆さんがひとり新聞を読んでいる。ところが、その婆さんの作る焼き飯が思いのほかおいしいのだ。その後「僕」はしばしばその店を訪れて焼き飯を食べることになる。しかし、店の扉を開け

た客たちは食事せず二階へとあがってゆく。中華料理屋はカモフラージュで二階ではどうやらカード賭博をしているようだ。

そのうち、賭博の常連の若い男が「僕」に話しかけるようになる。牛の屠殺を仕事にしているというその男の訛りが故郷のそれであることを「僕」は察知する。「僕」が久々にその中華料理屋を訪れたとき、その男が怒声を浴びせられ二階から転げ落ちてきて、入れ墨をした男に庖丁で刺される…。

印象深い設定と展開なのだが、やはりこじんまりとまとまりすぎて印象は否めない。故郷の場面などを書き込んでみると膨らませることはできないものかと思う。

『革』第35号では、玉田崇二「ラウンドアバウト」を共感しつつ読んだ。

年末、妻と三人の子供が妻の実家へ帰ったあと「僕」は自宅の近くから駅前の通りや裏通りを、歩き続けている。リモートの増えた仕事、妻の実家での人間関係、息子たちが呈している登校拒否の状態。どこにも行き場、居場所のない感覚を引きずりながら「僕」は歩き続ける。作品のなかですこしずつ時間は進行していつか、小学生だった長男が中学生になりもするが、登校拒否はかえって本格化する気配。事態の改善の見通しはなく、依然として「僕」は歩き続けているしかないのだ、出口のない迷路のような道を。